

全体講評

木原 俊行 大阪教育大学 教授

パナソニック教育財団は、学校現場の実践研究を支援するための助成制度を長く運用してきました。それは、平成 27 年度で、41 回を数えることとなりました。その目的は、同財団のホームページの実践研究助成の制度を説明する箇所です。次のように定められています (http://www.pef.or.jp/01_jissen/08_oubo_shinsei/08_oubo_shinsei.html)。

変化の激しいこれからの社会では、基本的な知識・技能の習得はもちろんのこと、それらを活用して考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力を身につけることが必要不可欠となりました。当財団では、この知識基盤社会を生き抜く子どもたちの育成を願い、教育課題の改善に ICT を効果的に活用しながら、取り組む実践的研究を応援すべく、助成を行っております。(以下、略)

この助成制度を通じて、数多くの学校が、子どもたちの学力を高めるために、また彼らの人間力を育むために、授業改善やカリキュラム開発に取り組んできました。また、校務の情報化などにも努力を傾注してきました。その歩みは、2890 件という膨大な数の実践事例のデータベースとして、同財団のホームページに蓄積されています。

さて、助成校は、研究計画に即して、一般校は 1 年間、特別研究指定校は 2 年間の実践研究に従事し、その成果を研究成果報告書にまとめます。

本冊子には、そうした研究成果報告書のうち、一般校のすぐれたものが集められています。

これまで、一般校による実践研究の研究成果報告書は、前述した財団ホームページには載せられているものの(2000 年度以降の助成校分)、それを味読する仕組みが整備されていなかったため、実践の特長や他校が参照できる点が関係者に届いていないことが危惧されました(特別研究指定校は、成果報告等の機会が多いため、届く可能性が高いのですが)。そこで、昨年度から、実践研究助成の一般校の研究成果報告書の内容等を評価し、すぐれたものを表彰する仕組みが導入されることとなりました。そして、表彰と同時に、当該学校の実践の特長等を実践研究助成の専門委員が解説することになりました。それが、本冊子です。本冊子は、一般校による実践研究の成果をより多くの方々に、より分かりやすく、お伝えするためのものです。

さて、研究成果報告書は、次のような観点を踏まえて、総合的に評価されました。

内容面 1：研究内容・活動の創意工夫

取り組みにその学校ならではの工夫を確認できる。

内容面 2：研究成果の説得力

取り組みの成果を量的・質的データで説明している。

内容面 3：研究内容の適用可能性

実践推進上の問題解決の過程を示しており、取り組みを他の学校が参照しやすい(実践推進上のつまずきや悩みにも言及している)。

内容面 4：実践の批判的検討

取り組みを自己点検して、改善のポイントやその具体化を構想している。

形式面：表現の工夫

分かりやすい文章で記されており、図表や写真が適切に用いられている。

こうした枠組みの下、平成 27 年度の実践研究助成の一般校の研究成果報告書 74 件の中から、読者がその魅力を吸収できる、14 件のものが選ばれました。最優秀 1 件、優秀 3 件、そして佳作 10 件です。校種としては、採択件数が多いのである意味では当然ですが、小学校が 7 件を数えました。残りは、中学校が 2 件、高等学校が 1 件、支援学校が 3 件、教育委員会・教育センターが 1 件という内訳になりました。

表彰された学校等の地域は、13 の府県にわたっています。さらに県立、市立、国立、私立と設置者も様々ですし、その規模にも違いがあります。なにより、研究課題が多様です。したがって、本冊子には多様な学校の営み、その成果等が載っています。それゆえ、読者は、所属校等の実践研究のモデルを見いだすことができるでしょう。

それでは、ここで、上記の観点のうち「研究内容・活動の創意工夫」を中心にして、複数の学校の研究成果報告書の内容に共通する、いくつかの特長を確認しておきましょう。まず、前提とも言えるのは、実践研究が特定の教師による個人プレーではなく、学校の組織的な営みとして構想され、実践されているという点です。それによって、各実践研究には、厚みが生まれています。例えば、優秀校とされた氷見市立宮田小学校は、小規模校であるにも関わらず、音楽科の指導における ICT 活用事例を 54 も収集しています。佳作校である、八尾市立大正小学校では、多様な教科・領域で「わかる」授業の実現を目指して、タブレット端末の利用が試みられています。同じく佳作校である、竹原市立吉名中学校でも、全教科でルーブリックや思考ツ

ールの活用に着手できています。なお、実践の量的質的充実には、当然、教師たちの共同的な学びの充実を伴います。それは、例えば、山梨学院大学附属小学校（佳作校）の場合に顕著です。同校の教師たちは、研修の機会をととても大切にしています。同校では、年度始めの 4 月から年度末の 3 月まで、「ICT 活用力の向上と日常的な授業への活用」を目指した研修会が数多く設定されています。それらは、同校における ICT 活用の先導的な実践の基盤形成の役割を果たしているでしょう。

また、すべての学校において、必然性のある研究課題が設定され、実践研究がスタートしています。例えば、宮城県多賀城高等学校（優秀校）では、「災害科学科」という学校設定科目の創設、その充実のためにタブレット端末の利活用が不可欠でした。また、豊明市立双峰小学校（佳作校）の場合は、日本語指導を必要とする児童生徒のための特別の教育課程や個別の指導計画、そして学習教材を用意することが喫緊の課題となって、教師たちが日本語指導のためのポータルサイトを構築しています。なお、研究課題設定の際には、大牟田市立天領小学校（佳作校）の取り組みに代表されるような、過去の実践研究の成果と課題の省察、それを踏まえた問題の所在の明確化というステップは、極めて重要です。

次いで、少なからずの学校において、1 年間という短い研究期間であるにも関わらず、実践研究の内容や活動が発展しています。換言すれば、研究計画がよく練られており、それに基づいて実践が段階的に遂行されています。最優秀となった、岐阜県立郡上特別支援学校の場合であれば、その実践は、学習内容の分析、それに基づ

く学習を支援するアプリケーションの開発，それを用いた学習の実施とその評価から構成されています。つまり，研究目的に即して必要な活動が適切に設定され，また実施されているのです。同様の営みは，佳作となった岡崎市立羽根小学校，美馬市立江原南小学校，三重県立特別支援学校西日野にじ学園，そして富山大学人間発達科学部附属特別支援学校等の研究成果報告書にも確認できます。

さらに，表彰された学校等のうち，いくつかのものにおいては，実践研究が，学校をまたいで推進されています。例えば，優秀となった篠山市中学校教育会情報・視聴覚部会の取り組みは，市内 5 校の共同実践です。複数の学校の教師たちが実践推進上のアイデアを共有することで，同部会は，反転授業という新しい試みを 1 年間に複数回実行できています。また，守山市教育研究所（佳作校）のケースでは，4 つの小中学校において，タブレット端末を用いた協働学習が実施されています。こうした学校間連携は，研究の持続的な発展という意味におい

ても，また研究成果の地域に対する還元という側面からも，その価値を確認できましょう。

表彰された学校の研究成果報告書には，その他にもたくさん，実践研究を充実させたい，発展させたいと願う学校が参照できる内容や活動が載っています。本冊子をお読みにになり，読者の学校の目指す方向性，それに至るためのアプローチや刻むべきステップを見いだしていただければ幸いです。

なお，今回の研究成果報告書の評価は，実践研究助成の専門委員の中から，次のようなメンバーが担当いたしました。

木原 俊行	大阪教育大学	教授
岸 磨貴子	明治大学	特任准教授
島田 希	大阪市立大学	准教授
中山 実	東京工業大学	教授
長谷川 元洋	金城学院大学	教授
森田 裕介	早稲田大学	准教授

【最優秀】

岐阜県立郡上特別支援学校

知的障がい者の卒業後の生活・就労に向けたコミュニケーション力の育成 ～「接客」「買い物」学習場面におけるタブレット端末を用いた支援アプリの開発と授業実践による効用の検証～

障がいを持つ生徒にとっては、その障がいの程度にかかわらず、高校卒業後に地域で生活するための能力、特にコミュニケーション能力の習得が重要になります。それは、就労の機会を得るためには、極めて重要な能力です。

岐阜県立郡上特別支援学校では、この点に着目して高等部の生徒を対象に、コミュニケーション能力の育成を行っています。このために、接客サービスを取り上げて、学習内容の分析、必要な学習支援としてタブレット端末の接客支援アプリを開発、これを用いた学習を創出しました。そして、障がいの程度が重度の生徒には主体的なコミュニケーション行動の促進を、障がいが比較的軽度な生徒には相手を意識したコミュニケーション能力の育成を行いました。

郡上特別支援学校の教師たちは、スムーズな接客の指標を定め、「喫茶サービス」の作業学習におけるアプリによる具体的な支援を通じて、個々の生徒に応じた能力育成を行いました。生徒は校内での模擬喫茶による事前学習を経て、他校の生徒との共同学習や地域での実践に従事しています。地域住民の評価なども取り入れられ、体系的な評価が実施されています。

教育実践の過程では、生徒の障害の程度に応じて、アプリの利用を変化させるなど、きめ細かい指導を通して、個に応じたスキルの指導や問題解決学習を進めており、コミュニケーション能力の向上が確認されています。これらの実践の手順についても、研究成果報告書では具体的に取りまとめられています。

本研究では、知的障がい者の生活・就労に必要なコミュニケーション力の育成が図られています。また、習得すべき内容やその評価法が事前によく分析されており、生徒および指導者にとって学習目標が明確になっています。アプリを使った生徒の行動映像を記録分析し、生徒の理解力を評価するという方法も確立しています。すなわち、本実践研究は、生徒個人の問題解決能力を育成するための手順が抽出されており、汎用性が高い内容になっています。

一方、郡上特別支援学校の教師たちが今後の課題に掲げているように、コミュニケーション能力の向上による生徒の生活意識や学習への態度の変化も、実践の評価として有効な情報と思われれます。また、本プログラムに参加した生徒数とその障がいの程度の分布、さらにプログラム実施のための教員の労力の程度も明らかにすると、他校の教師は、より現実的に、実践の体制を理解できると思います。加えて、本校では、アプリの開発に長期的に取り組んでいますが、アプリの継続的な維持、学習の課題設定や必要な学習内容の抽出などの手順の公開も、他校の参考になるでしょう。

【優 秀】

氷見市立宮田小学校

音楽科におけるタブレット PC やデジタル教科書等を活用した「授業事例集」の開発～日常的な ICT 活用による授業の改善～

氷見市立宮田小学校の研究成果報告書には、音楽科の「授業事例集」の開発プロセスとその効果が具体的に示されています。この点が、高く評価されました。

同校では、音楽科において ICT 活用が効果的であった授業場面を集めて、「授業事例集」を作成しています。そして、本研究成果報告書では、「授業事例集」の開発方法、そのフォーマットが具体的に示されています。例えば、「タイトル」「学年と領域」「題材名、活用した ICT」「写真と活用場面、児童の様子」を含むフォーマットを作成し、その大きさを A5 版にすることで、教師たちが抱きやすい、事例報告の負担感を軽減する工夫を講じたことが記されています。

このところ、ICT 活用の好事例を学内外において共有・普及させるべく「授業事例集」を開発する学校が少なからずみられます。今後、同じような取り組みを進めようとしている学校等は、同校の報告書からそのためのノウハウを得ることができるでしょう。

そのほか、「授業事例集」を開発するにあたり収集した 54 事例を整理・分類し、その特徴的な活用場面を写真とともに分かりやすく紹介・解説していること、さらには、音楽科における ICT 活用の効果が様々な方法を用いて検証され、その結果が示されている点もすぐれています。

本報告書から、「授業事例集」の開発が同校の

音楽科の指導における ICT 活用の特徴、効果、そして、今後の展望を再確認するよき契機となっていることが読み取れます。同校が、好事例の収集・整理を継続・発展し、その具体的な取り組みや成果を校内において共有するとともに、他校に向けて発信することを大いに期待しています。

篠山市中学校教育会情報・視聴覚部会

学習内容を活用し、深め合う授業展開の工夫について～映像教材等の補助教材を活用した予習の習慣化を通して～

篠山市中学校教育会情報・視聴覚部会の研究成果報告書は、「反転学習を行い、能動的・主体的な学習習慣を身に付けさせることを目標に、市内 5 校が連携・協力して組織的に研究している点」、「他校が参考しやすいようまとめられている点」、「実践の成果を学力分布のグラフを示しており、説得力のある報告となっている点」の 3 点が高く評価され、優秀賞に選ばれました。

同会は予習用動画教材を開発し、それを市内 5 校で連携・協力して研究を行っています。それゆえ、この研究の成果が全市的に共有され、部会メンバー以外にも取り組みが広がっていくことを期待できます。また、「反転学習、生徒同士の教え合い、生徒による発表、教師のまとめを授業設計に取り入れたこと」、「反転授業の課題」についても分析しており、効果的な指導を行う上で重要な実践的知見をまとめていることは、今後の実践の改善、研究の推進の可能性を高めています。さらに、定期テストの学力分布図を使って、本研究の成果を説得力のある形で

示していることは、この研究の知見を自身の実践に取り入れようとする教師を増やすでしょう。

以上のように、同会の取り組みは、篠山市の教育研究会の営みとして組織的に行われている研究であり、継続性、発展性に加え、他の学校・教師の実践への波及効果も期待できる実践研究であると思われます。ぜひ、今後も研究を進め、全国の学校の参考になる実践的知見を蓄積し、発信してもらいたいと思います。

宮城県多賀城高等学校

野外実習におけるタブレット PC 利活用の可能性を探る～言語活動の起爆剤として～

宮城県多賀城高等学校の研究成果報告書は、防災を主眼に置いた「災害科学科」という特色ある科目の開設と、その授業におけるタブレット端末の利活用に関する知見の蓄積が高く評価され、優秀賞に選ばれました。

本実践研究では、災害科学科におけるタブレット端末の利活用が、事前学習、実習、発表の場面ごとにまとめられています。まず、事前学習では、地学巡検の前日にブレインストーミング用アプリを用いて、アイディアの「可視化」や意見の「共有」が行なわれています。次に、野外実習（地層巡検）では、生徒らが路頭の走向・傾斜を計測用アプリで測定し、その結果を空中写真上に重ね合わせ、断層方向を確認しています。特に、手書きメモ用アプリとスタイラスペンを用いた観察記録の作成や、路頭写真の記録を積極的に言語活動につなげた点は、高く評価できます。最後に、発表における活用でも、写真記録のポスター発表への展開や、採取した

鉱物サンプルの顕微鏡写真等の口頭発表における利用など、タブレット端末を効果的に活用しています。

以上、災害科学科において、事前学習、野外実習、発表の3つのフェーズにおいて、タブレット端末を一貫して利用するという実践事例は、他校にとっても大いに参考になります。また、校内研修を通じた教員間での情報交換や、タブレット端末の活用への意識が高まり環境整備にまでつながっている点も評価できます。今後は、災害科学科の取り組みが全国に普及するよう、成果を発信し続けることを期待しています。

【佳 作】

山梨学院大学附属小学校

ICT を効果的に活用し、VMD（ビジュアル メディア デザイン）を制作する過程を通して育成する“次世代の表現力と発信力”

山梨学院大学附属小学校では、「次世代の表現力と発信力の育成」を目指して、「VMD（ビジュアルメディアデザイン）プロジェクト」が展開されています。同校では、VMD プロジェクトに関する実践研究の目的を4つ定めています。そして、研究成果報告書では、この4つの目的にそって、研究の方法と研究の内容・経過が明快に整理・記述されています。この点が、高く評価されました。

また、研究成果報告書の「研究の方法」を読むと、同校の教師たちが、ケースカンファレンス、児童や発表会の観客（保護者や教育関係者）へのアンケート、教師の自己評価など、実践の

過程およびその効果を多面的に評価するための活動を緻密にデザインしていることが分かります。教師、児童によるもののみならず、観客からも評価データを収集し、多面的な評価を実現しようとしているのは、特筆すべき取り組みであると言えます。

さらに、本研究成果報告書には、こうした取り組みを可能とする教員研修についても記述されています。これは、「教職員の ICT 活用力の向上と日常的な授業の活用」を目指して工夫されているものです。例えば、同校では、年度初めに、最新の ICT 機器の扱いやその活用についての研修が行われています。そして、そのスケジュールや効果も研究成果報告書において言及されています。本研究成果報告書からは、同校が VMD プロジェクトを展開するにあたって構想し、実践してきた取り組みを幅広く、そして、その具体的な方法を把握することができます。

同校が、これまで築いてきた実践研究の方法論を継続・発展させ、さらに充実した実践を創出することを大いに期待しています。

豊明市立双峰小学校

日本語指導を必要とする児童生徒のための教育課程編成支援エキスパートシステムにおけるタブレット端末で利用可能な授業設計支援サイト構築とその運用評価

豊明市立双峰小学校の教師たちは、日本語指導を必要とする児童生徒を指導する教員を対象とした「教案便サイト日本語指導支援サイト」の構築に取り組んできました。本研究成果報告書では、なぜこうしたサイトが必要なのか、そ

の背景がていねいに説明されています。そこから、読者は、日本語指導を必要とする児童生徒への指導を充実させる必要性、そしてそれに関わる教師たちにどのような支援が必要なのかを学びとることができるでしょう。

そして、本研究成果報告書では、こうしたサイトを構築してきた過程およびその具体的な内容がわかりやすく説明されています。例えば、「教案便サイト日本語指導支援サイト」からダウンロードできる文書例が挙げられるとともに、その工夫点が解説されてもいます。他の地域で同じような課題に悩んでいる学校、教師にとっては、こうしたサイトを構築していくプロセスを学ぶこともできます。

また、双峰小学校の教師たちは、このサイトを活用した日本語指導の効果を同校職員へのアンケートおよび担任教師へのインタビューをもとに検証しており、そのデータを研究成果報告書において示しています。つまり、サイトの構築からその活用、そして効果検証までのプロセスがわかりやすくまとめられています。

同校が、サイトの管理・改善に継続的に取り組むとともに、このサイトが幅広く使われることを目指した活動を展開することを大いに期待しております。

岡崎市立羽根小学校

児童のコミュニケーション能力の向上を目指して～学びの連続性を生かしたタブレット PC の活用～

岡崎市立羽根小学校は、タブレット端末を活用することで、「個人の学びの連続性を生み出すこと」「学び合いの中でコミュニケーション能力

の向上を図ること」を目指して、実践を展開してきました。こうした目的のもとで、それを実現するための環境整備や各教科の授業におけるタブレット端末の活用に注力しています。本研究成果報告書では、羽根小学校におけるこうした取り組みがよく伝わる写真が随所に掲載されています。つまり、ビジュアル面で工夫がなされた研究成果報告書となっています。

また、児童のノートの記述、保護者へのアンケートなど、複数のデータを収集・分析することで、取り組みの効果検証が行われています。その際に、肯定的な意見と否定的な意見の両方を取り上げられていること、成果のみならず、現時点での取り組みの限界にも言及している点を実践研究として高く評価したいと思います。

その理由は、こうした羽根小学校の姿勢は、学校における実践研究の継続・発展を実現する一歩であると考えられるからです。成果のみならず、現時点での限界や課題を整理することで、次なる取り組みにつなげていくことが可能となります。他の学校には、こうした実践研究のまとめ方をぜひ参考にしてもらいたいと思います。

そして、羽根小学校には、本研究報告書で示されていたようなていねいな振り返りを継続し、さらなる実践を生み出すことを大いに期待しております。

八尾市立大正小学校

ICT を活用した「わかる」授業の創造～ICT を活用した視覚支援およびタブレットパソコンの活用～

八尾市立大正小学校の研究成果報告書は、「多様な学力の児童に対する指導という同様の課題を抱える学校に参考になる知見である点」、「視覚化を通して児童の意欲関心、グループ学習、発表、授業の進め方がどのように変わったかを観察を通して示している点」の2点が評価され、佳作に選ばれました。

大正小学校の教師たちは、様々な発達障がいや学習障がいを抱える子どもたちにとっても「分かる授業」づくりを展開するため、ICT を活用した「視覚化」を軸に研究をしています。

研究成果報告書では、ICT を活用した「視覚化」について、4つの教科での実践事例が写真と共に説明されていました。そのうち、理科については指導案が示されており、授業の具体的なイメージを持つことができました。また、理科の事例における「視覚化」については、「教師が指示内容を説明するための視覚化」と「児童が実験・観察をするための視覚化」の2つのアプローチから考察されている点も、参考になります。

研究の結果は、「関心意欲」「グループ学習」「発表」「視覚化（授業の進め方）」の観点から、その成果が報告されています。また、一方で「分かりやす過ぎて子ども達の思考や考察に結びつかないことがあると感じる」という気づきも記されていますが、これは重要な発見です。大正小学校の教師たちが、実践の成果だけではなく批判的考察を通して得られた、この新たな

課題に対しても今後研究に取り組み、知見を積み重ねることを期待しています。

美馬市立江原南小学校

分かるといいな、伝わるといいな、ぼくの・わたしの思いや願い～タブレット端末活用を通じた学習支援と学校間連携で推進するコミュニケーション能力の育成～

美馬市立江原南小学校の研究成果報告書は、「特別支援学級における ICT 活用の知見が他の学校にも参考になる点」、「研究の内容・経緯が段階的に示されており、追従できる点」の2点が評価され、佳作に選ばれました。

研究成果報告書にあるように、特別支援学級の児童が「自分の考えや願いを相手の立場を尊重しながら相互に伝え合う」ことは、日常の学習面・生活面においても重要な営みです。江原南小学校の教師たちは、ICT を手段として活用しながら、その営みを段階的に実現しています。最初は、通級における指導でタブレット端末を日常的に利活用させ慣れさせる段階、次は、協働学習の場面で自己紹介し合う段階、そして、児童が創作した作品を紹介し合う段階、相互アドバイスの段階、アドバイスを基にグループ制作を行う段階、最終の相互評価を行う段階といった学びのプロセスの設定は、大変参考になります。

実践の評価については、特別支援学級を対象とした研究であるため定量的なデータによる評価は困難ですが、観察による定性的なデータを用いて児童のひとりひとりの変化（成果）が巧みにまとめられていました。

今後の研究の展開として「発言」、「動作」、「コミュニケーション」等の観点から長期的に研究を繰り返すこと、定性的にその変化を捉えていくことの必要性が示されていますので、今後、それらの実施が期待されます。

大牟田市立天領小学校

進んで運動の楽しさを味わう子どもを育てる体育科学習指導～運動の特性に応じた場づくりと ICT 機器の効果的活用を通して～

大牟田市立天領小学校の研究成果報告書は、「研究知見がモデル化され、分かりやすく他校の参考になる点」、「ニーズ分析に基づいて課題と研究の目的が設定されている点」の2点が評価され、佳作に選ばれました。

本研究成果報告書では、体育科の学習指導における ICT の利活用がまとめられています。体育科における ICT 活用は、これまでも多くのものが実践され報告されていますが、本研究成果報告書の特徴は、体育科における ICT 活用の単元構成の類型化および課題解決のプロセス化など、研究知見を体系的にまとめ、モデル化（一般化）している点です。

また、過去2年間の研究成果を批判的に内省し、問題の所在を明らかにすることを通して、研究目的が設定されていることも評価できます。具体的には、1年目では体育科における段階的指導のためのスモールステップの原則に基づいた指導を行い、特に身につけさせたい運動技能の確実な習得をめざす言語活動の必要性に気づき、2年目はこれに取り組んでいます。そして、本研究（3年目）では2年目の研究を通して明

らかになった「自分の動きの確認」、 「自分やチームの課題発見」という2つの課題を解決するためにICT活用の研究に取り組んでいます。

本研究成果報告書では、体育科にけるICT活用の様々な方法が紹介されています。すべての事例は、どのような状況でICTを活用したかを明記するために、「場作り」と「ICT活用」の2つの観点から紹介されています。ICTが活用される状況と切り離してICT活用をデザインすることはできないため、状況を描くために「場作り」の視点を研究の内容に含めることで、実践についてより明確なイメージを持つことができ、また、体育科におけるICT活用の際には何に注意して場をつくれればよいかを知ることができます。

継続的な研究により着実に実践的知見が蓄積されていますので、今後も体育科における発展的な研究に期待しております。

竹原市立吉名中学校

ICEモデルを適用した授業による思考力・表現力の育成に関する研究

竹原市立吉名中学校の研究成果報告書は、「昨年度までの思考力向上のための実践研究をベースにし、組織的に研究している点」、「ICEモデル、シンキングツールを活用した研究を行っている点」、「生徒アンケートや学力試験のデータをもとに実践を検証している点」の3点が評価され、佳作に選ばれました。

吉名中学校の教師たちは、全教科でICEモデルを取り入れた指導案を作成し、研究授業を行うなど、学校組織として、思考力等の育成に資する実践研究を重ねています。実践研究の企

画・運営上のそうした体制や手順は、他校の実践研究のよきモデルとなると思われます。また、ルーブリックを作成し、ICEモデルの視点から評価できるように工夫をしたり、イメージマップの記述や振り返りシートの記述、生徒アンケートの結果を分析したりして、ICEモデルを導入した効果を検証している点もすぐれています。そうした取り組み方は、同校の今後の研究の発展可能性も高めています。

吉名中学校は、竹原市教育委員会の方針で義務教育学校の準備をすることになり、広島県からは実践研究校としての指定を受けることになりました。それゆえに、地域の教育研究の中核を担う学校として、ますます研究を進展させ、その成果を全国に示してもらいたいと思います。

富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 知的障害特別支援学校におけるICTを活用した アクティブ・ラーニング～個に対応したチャレンジ活動と教科での協働学習～

富山大学人間発達科学部附属特別支援学校の教師たちは、知的障がいのある小学部から高等部までの児童生徒に、「支援ツール」となるタブレット端末を提供し、児童生徒が主体的に活動し、自己評価できる環境を構築しています。これらツールは、「チャレンジタイム」や各教科の授業において、児童生徒が個別あるいは協働学習で活用しています。特に協働学習では、チャレンジ活動に取り組ませることで、アクティブ・ラーニングの実現を図り、生徒児童に、自分たちの活動の振り返りを促進しています。これらの学習を通して、児童生徒の社会的・職業

的自立を目指す教育が進められています。

これまで、同校の教師たちは、アナログ媒体の支援ツールを用いてきました。今回はこれをタブレット端末に実装して、児童生徒に活用させています。そうしたプロセスでさまざまな活動を展開し、その実践記録を蓄積している点は、他校にも参考になります。

特別支援学校での児童生徒の多様性に細かく対応した結果ですので、さまざまな活動の展開は本実践研究の可能性を示す一方で、成果としての具体性にやや欠ける部分も見られます。児童生徒それぞれの障がいの程度と、活動内容や具体的な達成度や活動の成果が整理されると、本実践研究による知見は、いっそう他校の参考になると思われます。また、小学部から高等部までの縦断的な視点での活用方法の取りまとめも今後期待されます。

三重県立特別支援学校西日野にじ学園

知的障がいのある子どもの「読み・書き・話す」を支援する研究

本実践研究では、三重県立特別支援学校西日野にじ学園の教師たちは、自閉症の児童に文字や言葉の学習を支援する教材、指導法の開発を行っています。児童の状況が異なることから、それぞれの障がい特性や興味関心に対応させて、言葉に関する学習を系統的に実施しました。具体的には、文字の認識、書く、読むことに対応させた学習を展開しました。西日野にじ学園の教師たちは、この系統的指導にタブレット端末を用いており、その効果を検討しています。彼らは、これらの実践を促進するために、他校で

の実践状況の情報収集や、学内での実技研修を推進しています。

児童の状況に適応すべく、個人の特性を把握した上で、文字の認識、書く、読むについて、既存の教材とタブレット端末のアプリを組み合わせ、系統的かつ効果的な指導を検討した点も特徴的です。

知的障がいのある児童生徒の実態に合わせて、しかも系統的に指導することは、容易ではありません。本研究報告書では、小学部の児童3名に対する系統的な指導が紹介されていますが、その波及効果が期待されますので、今後は、本実践をほかの児童生徒にも適用する方法について検討することも望まれます。

児童生徒の実態に対応した指導法の検討についても、その手順が示されれば、他校における実践の参考になるでしょう。さらに、この指導の結果、どのような能力の獲得に至ったかについても興味もたれます。

守山市教育研究所

ジグソー学習支援ツールとして iPad を活用した協働的に学び合う授業の実践研究～巡回型 ICT 支援の並行実施による学びのブラッシュアップを目指して～

守山市教育研究所の研究成果報告書は、ジグソー学習支援におけるタブレット端末の活用に関する知見がすぐれており、佳作に選ばれました。

本実践研究では、児童・生徒の「思考の可視化」や「伝達・共有」の促進ツールとしてタブレット端末を位置づけ、3つの小学校と1つの中

学校において協働的に学び合う授業を実施しています。これらの授業は、すべてエキスパート活動、ジグソー活動、クロストーク活動の3段階で構成されており、一貫してその有用性を示している点は評価できます。加えて、児童・生徒 122 名を対象とした調査が行われ、回答が集計され、対応のある t 検定を用いて意識の変容が有意に高くなっていることが示されている点も秀逸です。

また、巡回型 ICT 支援員による校内研修及び ICT 利活用支援の実施においてもタブレット端末が有用であったと述べられています。ICT 支援者と授業者の間で実施されてきた「ICT 支援の段階

的調整」は、他の地域においても実践可能な知見です。加えて、これらの成果を ICT 活用通信として市内全教職員に配布したり、必要なスキルや授業における活用方法、デザインの視点などをオンライン教材として配信したりしている点も、充実しています。

以上、本研究成果報告書は、他地域の学校にとって、授業実践の参考となる知見であるといえます。また、ICT 支援の立場での知見についても広く活用できるものであると言えます。今後は、市内にとどまらず、日本全国への研究知見の配信を期待しております。